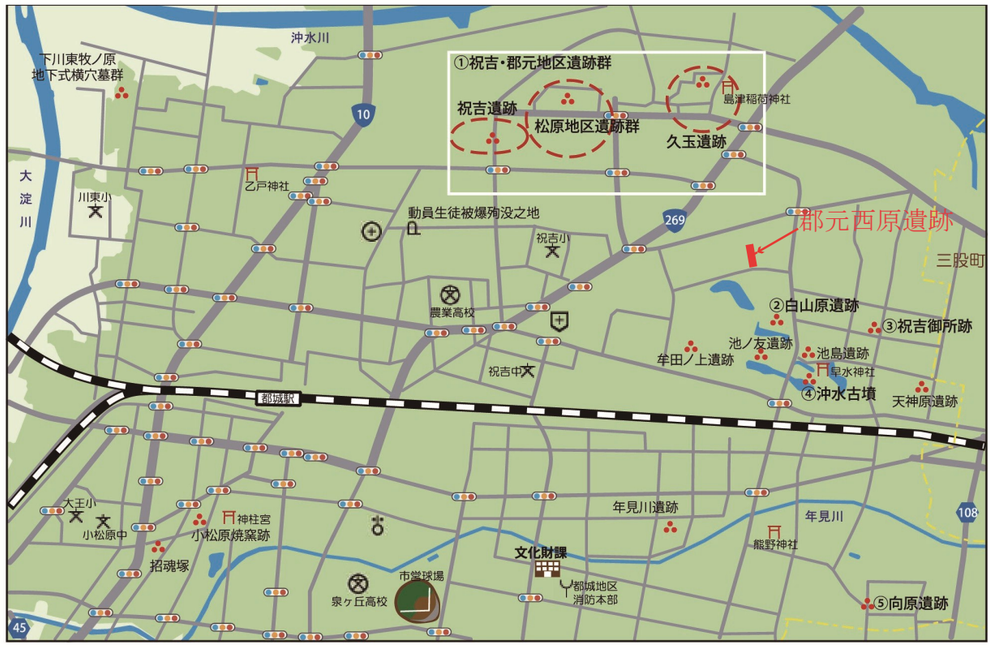
# 郡元西原遺跡現地説明会資料

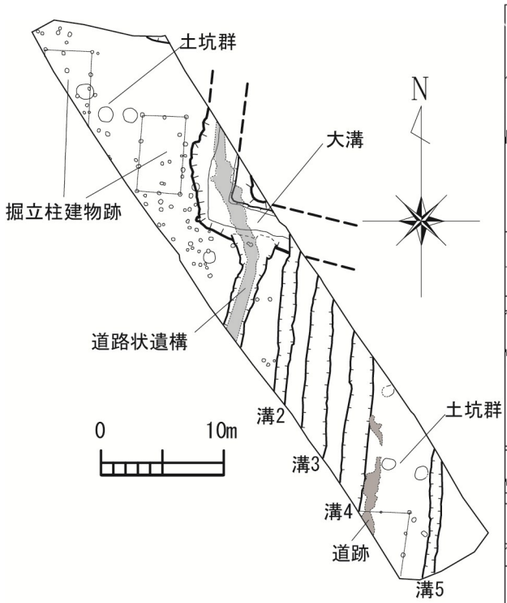
郡元西原遺跡（宮崎県都城市郡元町）は標高約157mの開析扇状地上に立地します。一帯では、松原地区遺跡群、久玉遺跡、池ノ友遺跡、牟田ノ上遺跡、池島遺跡、祝吉第3遺跡などの平安時代から中世の遺跡が多数確認されており、鎌倉時代に島津荘の下司職を任された惟宗忠久（島津氏初代）が館を構えたという伝承が残る県指定史跡「祝吉御所跡」は、本遺跡の南東約500mにあります。

市道鷹尾上長飯通線改良事業に伴って、平成28年5月から8月まで同遺跡の第2次発掘調査を実施しました。調査の結果、11～12世紀の大溝1条、中世の道路状遺構1条、土坑7基、掘立柱建物跡3棟、ピット群、近世～近代の溝状遺構6条、近世の道路状遺構1条、ピット群を検出しました。また包含層と遺構内からは、土師器、須恵器、貿易陶磁器、国産陶器、国産染付、鉄製品等が出土しました。

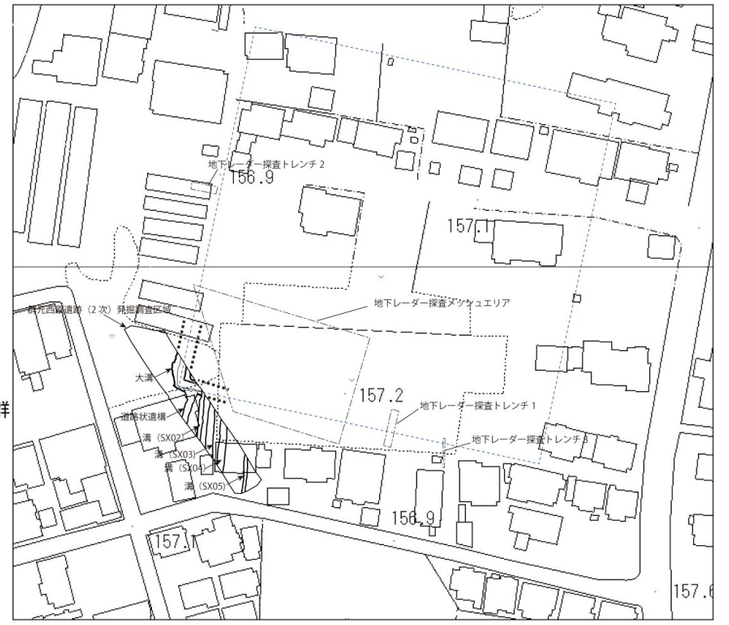
大溝は平安時代末の施設の堀の南西隅角部と思われます。その断面形態は逆台形で、素掘りですが非常に丁寧な造りです。この遺構の埋土下層からは、11世紀後半から12世紀前半にかけての土師器・黒色土器・白磁が出土しており、その上部には霧島御鉢起源の宮杉火山灰が堆積していました。鎌倉時代（13世紀）には、中ほどまで埋め立てられ、北から南に走向する道路につくりかえられており、桜島文明軽石（1470年代）が降下した室町時代には完全に埋没していました。




宮崎県都城市郡元町周辺の遺跡地図




郡元西原遺跡第2次発掘調査遺構平面図




遺跡周辺地形図

0　100m

大溝遠景（北西上空から）

大溝近景（南から）

島津荘政所下文（承安5年：1175年）

宮崎県都城市の郡元町一帯は、『日向国図田帳』にみえる諸県郡の「島津院」といわれる区域にあたり、島津荘の現地経営拠点である「政所」があった場所だと考えられてきましたが、これまでその詳細な位置は明確ではなく、具体的な遺構も確認されていませんでした。

島津荘は、万寿年間（1024～1028）に大宰府大監の平季基が上記の島津院を中心に開発し、関白藤原頼通に寄進して成立しました。当初数百町歩しかない小規模なものでしたが、院政期になって、急速に拡大していき、平安時代末から鎌倉時代にかけて、総田数8千町歩を超えて、薩摩・大隅・日向三箇国の半分以上を占める日本国内で最大規模と言われる荘園となりました。

今回、本遺跡で確認された大溝は、今まで見つかっていなかった島津荘成立～拡大期における現地経営拠点（荘政所）の一部である可能性が高いと考えられます。

【2016年9月17日　宮崎県都城市教育委員会文化財課作成】